

卷

頭

の

言

葉

ふと聞いた落語

聞くとはなしに聞いていたラヂオ放送、それは「試し酒」という落語でした。ハナシというのは、五升の酒が飲めるか飲めないか、と賄けた男が、みると中の一滴も残さず飲みほしてしまうというのですが、その飲みっぷりを表現するのに「酒を飲むのではなく、まるで酒が生きものゝようだ、流れになつて入つて行くようだ」というのです。全くうなされるほど巧い表現です。

書道にしても「書は腕で書くのでなく体で書く。筆は体の一部となつて生きておらねばならない」といわれているほどであり、剣道にしても「人が斬るのでなく剣が斬る。剣に魂が入つていなければならぬ」といわれています。いずれの道でも、極地は首同じことでしょうが、お題目を唱えるにしても、心もついやす、お題目の魂が、みずからお題目を唱えるというようになる時、そこを唱題の極地というのでしょうか。落語を聞いて、つくづく感ぜさせられたことでした。

# 一鷺 峰一月号一目次

第2巻・第10号・通巻第16号

巻頭の言葉・ふと聞いた落語 ······ 1

伊藤日定上人と醒悟園本妙庵 ······ 3

自我講義第1回

久遠の本仏と人間釈尊 ······ 日高白象 27

北陸・関西・九州

街頭布教紀行 ······ 編集部 39

教義説明・友がなければ ······ 36

発行所の変更にともなって ······ 57

編集後記 ······ 58

表紙題字・身延山法主藤井日静院下

表紙写真・インド靈鷲山へ渡る身延山金銅の釈尊像

表紙印刷・大阪東洋印刷社々長藤原秀憲氏寄進

# 伊藤日定上人と 醒悟園本妙庵

日蓮宗大本山池上本門寺貫首伊藤日定上人は本妙庵参拝の帰途、車中で不快となりそのまま本門寺で御遷化され、計らずも本妙庵参拝が最後の仏事となり、こゝでの御挨拶が今生一期の御挨拶となり、こゝでの撮影が最後の遺影となつた。

身延山大学三年

川島本良

「日蓮宗門切っての名布教師」「近世不世出の名説教家」

と、うたわれていた大本山池上本門寺の貫主・伊藤日定上人が、去る十月二十二日の午後九時、脳内出血のため突如、御遷化されました。

突如、それは全く突如のことでした。

「今が今まで、あれほどお元気でおられたのに……」

「宗門多年の宿願であった本門寺の大堂再建も完成し、落慶大法要も今寸前というところであったのに……」

悲報を伝え聞いた全国日蓮宗の人々は、僧侶といわば信徒といわば、大きな衝撃を受け、深い悲しみに閉ざされました。

伊藤上人は、日蓮宗にとって「生きた宗宝的存在」でした。それだけに、このたびの突如の御遷化には、「巨星にわかに落つ」という、感を深くしない者はありませんでした。

伊藤上人は宗會議員として、また宗務顧問として、宗門に尽された功績は、枚挙にいとまもありません。特に、日蓮宗布教院の院長として、多年の間、全国布教師の養成に尽瘁せられ、上人をして「布教の恩師」と仰がない説教家はいないくらいです。

わざても昭和三十三年六月、池上の貫首になられてよりは、戦時中、戦災焼失した本門寺大堂の再建という、宗門積年の宿願達成のため、文字通り身命を惜まず、席の

あたゞまる暇もなく、全国勧財布教に東奔西走され、通常ならば、一代では困難といわれていた此の大事業を、わずか数年の中に完成されたのです。その功績でさえも、まこと宗門史上、不朽とたゞえて過言ではありません。

それだけに、この間ににおける上人の労苦・辛慘は、言語に絶するものがあつたことでしょう。

池上山上、旧に倍する美觀と威容を誇る堂々たる大堂を完成された上人が、九月十八日、中老僧日法上人が謹刻された国宝日蓮大聖人の御尊像を、それまで安置していた宝蔵より、新装なった大堂内陣へおうつし申上げる御遷座式をいたなされましたがこの時の、上人の感慨・法悦は如何ばかりであったことでしょう。

上人は、明治二十五年十一月十六日、山梨県南巨摩郡中富町、身延山より數里はなれた所に生まれました。幼名は保蔵。

明治三十九年、十四才にして南巨摩郡静川村妙光寺住職小松日徳上人について出家され、海闊と改名。

ほどなく身延山短期大学の前身である祖山学院に学び、教師島智良上人に私淑、醍悟庵本妙庵で薰陶されること数年。

島上人、中古天台の古文書研究のため、比叡山に留学されるや、その後を追い、膝下に給仕の誠を尽すも、大正三年六月七日、比叡山笠坂本寺院の一隅に、恩師の遷化さるゝにあいました。

この間、天台宗大学にも学び、大正七年

島智良上人の五十回忌でした。

戰後、昭和一十八年には静岡県清水市の本山海長寺の貫首となられ、昭和三十三年六月、池上本門寺に晋霑されたのです。

時に、本門寺貫首の第一の使命は、焼失した大堂の再建でした。上人は全国にワラジをはかけ、北は北海道、南は九州の果てまでも、勧財布教のため超人的努力をつづけられました。

大堂再建工事は着々として進みました。今年に入って工事完成も間近かになつて来ました。

たまたま昭和三十九年六月七日は、恩師

「私は山梨県の貧村に生れ、出家して大本

がつきませんでした。

山池上の貞首とまでなることが出来、しか

3

も、宗門の宿願であった大堂再建も、間もなく達成されようとしている。

これみな、宗門有縁無縁の方々のおかげであるが、とりわけ私の青年時代を蒸陶された、島恩師の御恩のほどは、終生、忘れられない。私の今日あるは、ひとえに島恩師の御指導のたまものである。本妙庵は、我が搖籃の地、その振り籠をゆすぶった方こそ、島恩師であった。

今年は恩師の五十回忌。大堂再建工事中のため、祥月命日には行けないにしても、何とかして本妙庵に詣で、恩師の墓所に五十回忌の法味を捧げたい」

上人は心から、そう願つておられました然し六月七日の祥命には、どうしても都合

ところが、本山の命により六月一日より本妙庵に入られた日高上人が、一週間目にあたる六月七日、駕籠会の学生をはじめ波木井部落の信徒と共に、島上人五十回忌報恩法要を営んでいたのです。

然し本妙庵には、過去二十数年の間、身延山大学教授室住一妙先生が住まわれ、庵を譲持しつゝ、此処から毎日大学へ通つておられたことは、あまりにも有名な話ととなっていますが、室住先生が庵を出られてから後、本妙庵は一体どうなったのか、無住荒廃のまゝなのか、それとも代りの人があ

誰か入っているのか、知る由もない伊藤上人は、翌七月、寸暇をさいて身延に詣で、

總務望月上人にあって、

「五十回忌法要を八月六日に。。。」

と相談されました。この時、はじめて本

妙庵の近況を承知されたようですが、八月

六日といえは、あいにく日高上人が、北陸

三県につゞく関西方面の筈頭布教から、更に九州布教へと足を延ばしている頃です。

然し、幸い九月十七日は、本妙庵開山本妙臨師の祥月命日、その前日の十六日は、年一回の御縁日大祭、特に今年は、この日身延山棲伴閣祖師堂で開闢された日蓮大聖人の御尊像を、本妙庵へお迎えする入仏式をいとなみ、部落の信徒も大勢参拝することになつていきました。

そこで、

「この際、一緒になされては、。。。」

といふ案を提出しましたところ、またあ

力する

という自発的決議をし、その甲出のもと

いたく、九月十八日は池上の御遷座式。そこで五十回忌法要は更に延期して、いよいよ十月六日と確定されたのでした。

#### 4

ちなみに本妙庵にお迎えする日蓮大聖人の御尊像は、日蓮宗布教研修所の登記をしている吉松白龍師と、神戸甲南大学を今春卒業した花房毅君とが、それぞれ自発的に一万円を奉納されたのを種金として、久留米の井上ヨシノさんが日高上人の御衣代として奉納された二万円、加うるに横浜講妙会の方々が、

「身延山本門戒壇建立の悲願を達成する前提として、本妙庵興隆のため、全面的に協

に奉納された六万円。更に身延町若松屋仏具店の特別の計らいと、日高上人の自費によつて求められました。

いよいよ九月十六日、その午前中、御尊像は、波木井の世話人數名帯同して、身延の権神閣祖師堂にてお受けし、西谷祖廟に詣で、身延町・梅平を経て波木井に到着、こゝに待期していた部落の人々と隊列を整え、擊鼓唱題、八丁の山坂を登つて本妙庵へ迎えられ、午後より身延山總務望月日雄上人の導師のもと、大阪の岡本宗治氏御夫妻、横浜講妙会の田中資郎氏、等々の来賓布教研修生、身延山大学高校の学生有志、波木井部落の人々、本妙庵信徒をあげて、盛大な入仏式がいとなまれたのでした。

その頃、池上の伊藤上人より、

「荒廃した本妙庵を修復する足しに・・・」

と、自費十万円が寄進されました。思いもよらない大金の奉納。そこで、これを本にして、本山よりおじそ十万円の資金と、日高上人の方より自費およそ一千万円の資金を加えて、本妙庵の修復にとりかゝりました。

本妙庵は昭和の初め、身延山学生の失火によって、本妙臨師在世当時の堂宇、藏書什物の悉くは焼失し、当時のものとしては禪定密・禪定石・御使用的井戸、それに若干の軸物と半焼の書籍を残すのみでしたが、時の法主望月日謙上人の発願によつて、現在の堂宇が、昔の面影を偲ばしめるよう再建されたのです。

然し、爾來三十有余年の風雪には、さす

がに建物もいたみ始め、室住先生の御退庵後、無住となつてからといふものは、屋根は破れ、壁は落ち、床も朽ち、戸も破れ、

庭草はおいしげるにまかせて、さすがに波木井部落の人々ですら、その無気味さに、近寄り難い状態となつていました。

「ともかく十月六日、伊藤實首さまたち御一行が来られるまでには、何とか間にあわせねばならない」

九月のお彼岸中より、懸命なる修復作業が連日連夜つづきました。夜明けと共に仕事にかかり、屋内の仕事の終るのは、毎日夜半の十一時をすぎていました。

鷲峰会の学生は、二人も本妙庵に泊り込みました。部落の男衆は、職人さんを手伝い、女衆は、本妙庵を中心として前後一里に亘る参道をはじめ、墓地・境内各所の除

草・整地のため、鎌や鋤をふるいました。本山の学生も、暇をみては応援にかけつきました。

この夏、三週間に亘る街頭布教のため、憲卒し切っていた鷲峰会員の、この激労は、涙ぐましいばかりでした。

然し本妙庵は、日々に一新して行きました。労働には希望がありました。そしてこの労働を通して鷲峰会学生同志の团结と、学生と部落の人々との融和は、ますます深くなつて行きました

接待用の座布団・什器等の一切は、東京で準備され、昼食に手打ソバを作つて歓待するため、ソバ粉は身延の駅から、更に二里も入った山奥で探し出され、ソバ粉を練る山イモも、山々から手分けして掘り出されました。

こうして作業は、連日昼夜一週間にわたりました。

つて続けられました。そして本妙庵内外一切の整備も一応どこのい、新装なった須弥壇上、九月十六日入仏されたばかりの大聖人の御尊像の背後に、新しく表具された大マンダラ大本尊が安置されたのは、十月五日の、もう夜も明けんとする頃でした。

そして翌る八月六日、御一行は本山の朝動時代の楽しい思い出に、時のたつのも忘れているかのようでした。

さて翌る八月六日、御一行は本山の朝動に参拝し、つづいて本山の学生食堂で、学生時代を思い起しながら、食法を唱えて朝食。法主貌下にお目通りもすませ、これよりローブウェイで奥之院思親閣へ参拝。その足で、いよいよ本妙庵へと向われました。

伊藤上人は、この日（五日）早朝、池上を出発されて、身延町玉屋旅館に落ちつかれ、午後より東谷覚林坊における同窓会に臨まれました。

伊藤上人は、五十代から六十代の参集した同窓生は、鉢々たる日蓮宗寺院住職ばかり。関東・関西・東北・北陸、遠くは北海道・九州よりも馳せ参ぜられた数は、三十名を越えてい

き、旧甲州街道を通って、清正公堂の前より本妙庵の参道へ入りました。

参道は幅三尺、距離およそ半里で、左右にはクヌギ林と畠が点在し、東に富士川、南

に波木井河をはるかに見おろし、北に身延の峰、西に鷹取の峰につついて七面山の大  
周囲には、一軒の家もなく、昔かわらぬ自然の風光を、そのままとどめており、伊藤上人をはじめ御一行は、学生時代、幾度もかよった此の道の、思い出の一つ一つを彷彿するが如く、感慨深げに談笑されつゝ参道をたどられました。

この時、おそらく伊藤上人の胸中には、五十年の歳月を越えて、今、恩師島智良上人のお供をしながら、本妙庵に通っている「一般の参詣者の中には、此處のいわれをような思ひが、ふつぶつとして去来していることでしよう」

この時、おそらく伊藤上人の胸中には、五十年の歳月を越えて、今、恩師島智良上人のお供をしながら、本妙庵に通っている「一般の参詣者の中には、此處のいわれを知らない人が多いことだろうから、誰にでも解るように、禅定窟を説明した看板を立てて」という御依頼がありました。本妙庵は此

御一行が、禅定窟に到着したのは午前十一時三十分、こゝは台地の突端、しかも最も高い所、周囲には苔むした巨大な老杉が數

本亭々として中天に摩し、幽邃の気たゞよう中央には、七尺四方、深さ二丈近くの禅定窟が、苔むす岩で築かれています。

この神氣たゞより禅定窟は、曾って本妙庵が、村人の協力を得て築き、みずからこの中で、唱題修行し、禅定三昧に入られた跡と、伝えられているものです。

御一行が暫し、立ち去り難い感懶にひたりながら、禅定窟を拝している中、「一般的の参詣者の中には、此處のいわれを知らない人が多いことだろうから、誰にでも解るように、禅定窟を説明した看板を立てて」という御依頼がありました。本妙庵は此

御一行が、禅定窟に到着したのは午前十一時三十分、こゝは台地の突端、しかも最も高い所、周囲には苔むした巨大な老杉が數本亭々として中天に摩し、幽邃の気たゞよう中央には、七尺四方、深さ二丈近くの禅定窟が、苔むす岩で築かれています。

この神氣たゞより禅定窟は、曾って本妙庵が、村人の協力を得て築き、みずからこの中で、唱題修行し、禅定三昧に入られた跡と、伝えられているものです。

御一行が暫し、立ち去り難い感懶にひたりながら、禅定窟を拝している中、「一般的の参詣者の中には、此處のいわれを知らない人が多いことだろうから、誰にでも解るように、禅定窟を説明した看板を立てて」という御依頼がありました。本妙庵は此

さて本妙庵に到着して暫時休憩。喉をうるぼしてから、伊藤上人の感動にみちた御挨拶がありました。

聖をはじめ、布教研修生、身延山大学高校の学生有志、お堂にあふれ出た近郊信徒の唱和する五十四回。報恩大法要が、厳かにと

この御挨拶は、テープコーダーに録音さ

行われ至した

れましたが、計らずも、このテープこそ、後で、録音した法要中のテープを聞いて上人の今生最後の肉声を留めるものとなつてみれば、自我偈説誦の中ば頃、伊藤上人は万感湧に迫られてか、かすかにもうゝ嗚咽たのです。

上人が御挨拶のされてゐる間、御一行中

後で、録音した法要中のテープを聞いてみれば、自我偈誦の中ば頃、伊藤上人は万感胸に迫られてか、かすかにもるゝ嗚咽の中、声も暫し途絶えていました。

の書家である千葉県松戸本覚寺の加藤雲洞先生が、筆をふるわれた九尺塔婆が、二本連てられました。一本は本妙鑑師報恩の塔婆。一本は島智良上人（法号・唯誠院日精上人）五十回忌供養の塔婆。施主名には両者とも、身处山学園同窓生一同と、したゝものがさられたことでしょう。

新編著者

やがて伊藤上人大導師のもと、全国各地

より此處本妙庵に參集した二十有余名の各

これに並ぶ島上人のお墓の前に、それぞれ塔婆を立て、自我偈一巻を誦誦し、参会者の一人一人が菊一輪を墓前にそなえられました。

墓参後、このお墓の前で、記念写真をうつしましたが、この時、「本妙臨師のお墓の玉垣や、醒悟園之記を刻んだ記念碑、それに島上人のお墓の前にある石の壺蓋、それは丸い鉄鉢の形をし、蓋は天台笠の形をしているものであるが、これらは皆、私達の学生時代、学生が力をあわせて作ったものである」という、伊藤上人のお話しがありました。

この話しが、當時の身延の学徒が、如何に本妙庵を尊び、本妙庵に親しんでいたか、ということを偲ばしめるに足る披露でした。但し、この時の記念写真が、伊藤上人最

後の遺影にならうとは、誰一人として神ならぬ身の、知る由もありませんでした。

さて記念撮影後、御一行は、本妙臨師が勉学された三畳の間の取り付けの机、それは本妙臨師が、夜、横になつてやすむといふことはなく、眠むくなれば机によりかゝつたまま眠られるため、体が半身ねめこまれるよう、机の中央を半円にくりぬいたのですが、そういう机を拝観したり、或は、臨師が勉強中、疲れて来ると、見つめながら禅定三昧に入られたという、庭前の禅定石を拝観したり、教策の一時をすごされました。

この教策中、「我々の学生時代には、試験期になると、わざわざ本山から本妙庵まで駆けて来て、本妙さんの机を奪ひあつて勉強したものだ」

という思い出話もありました

という御依頼もありました。

「本妙臨師のお墓のそばにあつた大きな松

の木や、本妙庵の入口にあつた大きな枝垂  
桜が、台風のため倒れてなくなっているが  
その代りの木を、本日の参拝記念植樹とし  
て、今は時候が悪いから、植樹の良い時候  
に、同窓会の名で植えおいてもらいたい」  
或は、

「本妙庵の裏庭の、椿の生垣にさえぎられ  
て、富士川の流れが見えなくなっているが  
本妙臨師が富士川を下る船を見て、  
△可哀そうに、あの船は沈没する」

と予言された有名な話は、何時も勉学  
されていた三疊の間から眺められてのこと  
だったのであるから、三疊の間から富士川  
が見えるように、椿の生垣の間を少し開け  
ておいてもらいたい」

9

その後、昼食という段取りでしたが、こ  
ともあろうに、この日の早朝、本妙庵の世  
話人であった依田幸吉さんという老人が急  
逝したため、部落の慣例により、男も女も  
全戸をあげて葬儀の準備にかゝっていました。

この地方は都会と違って、葬儀を簡略に  
せず、昔の作法通りにするのです。このた  
め、いくら手があつても足りるものではあ  
りません。猫の手も借りたいくらいです。  
従って、本妙庵の方の、手がはぶかれる  
のもやむを得ないことです。然しそれにし  
ても、昼食の準備は昨日来、里の世話人宅  
で進められていてことでもあり、既に人数

分の配膳も料理も、本妙庵まで運び上げられていきましたので、

手うすの中でも、何とか正面しながらソバを打っているだらう

とばかり思っていました。ところが、しかも、お昼近くになつて、里の方から、「どうしても手が足りない。三十人分から

のソバを打つには、とても間に合わない」という知らせがありました。知らせて来た人は、血相を変え、息もきらせていました。聞けば、昼食準備のため、昨夜は、一時間ぐらいしか寝ていない、ということでした。

こと此處に及んで、御飯を炊いても、間

に合うものではありません。二週間も前から連日連夜、万全の準備を整えて来ながら、思わざる事態に立ち至り、これでは泣いて

も泣き切れない思いをしたのは、日高上人をはじめ御一行を迎えるすべての者の、偽らざる心境でした。

然し、こうした不時の出来ごとの中、ギリギリの所まで奉仕の誠を尽し抜いて、しかも遂に尚にあわないとあっては、これも仕方のないことです。

そこで、ともかく御一行の方々には、樂しみの手打ちソバを抜いた、料理だけの御膳に座って頂きました。伊藤上人をはじめ御一行の方々は、

「ソバは、つなぎのソバだ。来年の十月六日、また一緒に参詣に来るから、それまでの楽しみにとつておこう」

と、寛大にはよえられ、田舎料理をつゝき、神酒をくみかわしながら、なおも尽きせぬ思い出で、席を立つのも忘れて懇談さ

れていきました。

がいた

「そういう人は、闡法のベテランで、説教の内容でも、大抵のことは知っていた。」

「寺小屋のおばあさんだ」

その、なごやかな談笑の会話を、録音テープから紹介しますれば、伊藤上人たちの学生時代は、毎月十六日、島智良上人につけられて本妙庵に詣で、衣の裾をまくり、袖をたくしあげて、ます内外の掃除をし、稽古台にして、学生が入れ代り、立ち代り説教をしていました、ということです。

その後、説教中に集つて来た村人の信徒を間違っている／といい出したりして、みんな高座の上で弱ってしまったものだ」

「その後で、島上人が一人一人の説教を、丁寧に批評したり指導しておられた」

「あれは本当に為になつた。有難いことだ

すが、説教中、最も弱つたことといえば、

「日によっては、信者が一、三人しか来ないこともあつたが、二、三人に向つて説教

するということは、満堂の聴衆に向つてするよりも、やりにくいくことだった」

「その中で、何時も欠かさず聞きに来る人

本妙庵信徒の中には、学生時代の伊藤上人を記憶している老人も一、三いました。梅平の身延薬局のおばあさんは、今年八十

三才になられます。伊藤上人が本妙庵に来られると聞くや、小躍りして喜びました。  
「おぼえていますよ伊藤上人は。の方は背の低い、丸顔の学生さんでした。本妙庵に来る学生さんたちの中では、牛も一番若かったようですが、お説教となると一番上手でした。

昔は本妙庵に電気がなくて、ランプやアセチレンガスで幻燈を写しながら説教をいたものです。伊藤上人が幻燈の弁士をされると、まるでフィルムの中の人物そのもの

のようでした。

「きっと、この上人は、今に日蓮宗の、偉いお坊さんになられるだらう」と噂させていたのですが、池上の貫首さまになられて、我がことのように嬉しく思ひます。」

こう言っていた薬局のおばあさんは、九月のお彼岸の頃から病床に臥しました、食餌も殆ど喉を通らないような状態でした。然し六日の当日には、伊藤上人にお会いするため、注射を打ってもらい、衣服も一装に改め、あえぎあえぎ八丁の山を登って本妙庵に参拝されたのです。

所が、老令・病身のため、折角登詣されながらも、時すでに遅く、上人の御一行は既に山を降られた後でした。

若し上人と、このおばあさんが対面されたならば、どれほど感激的な対面がされたことでしょう。上人にとっても、おばあさんにとっても、かえすがえす残念なことでた。

御一行が、本妙庵を後にされたのは、午をモットーとされておられた一班が、端的に  
后一時近くでした。道は来る時とは反対の にうかゞわれる思いがしたました。

波木井の方へとり、里に出て、更に身延町 役場まで歩かれました。時間にして優に三十分。この日、とりわけ残暑きびしく、皆汗ばんでおられました。

早朝、本山の勅行に参拝し、奥之院恩親閣につゝく本妙庵の参拝には、誰しも、さすがに疲労を覚えられたようでした。

身延町役場の前で、暫らくタクシーを待たれましたが、伊藤上人は、二三台のタクシーが折り返し運転で、全員を送り終るまで、役場の前に残られ、そして最後のハイヤーに乗られたのでした。

こゝにも上人が、大本山の貫首であられ

と述懐されたということです。  
ながら、また御一行中、最高年令者であら  
れたのにもかゝわらず、日頃「慈悲修身」

と思う

翌の七日、身延を発ち、池上へ向われる身

延線の、電車の中で嘔吐され、午後一時三十分池上に到着。二・三通の手紙を整理される中、急に昏睡状態に落ち入られたのです。

### その後、主治医をはじめ周囲の方々の、

懸命なる看護によって、一時小康を保たれただのでしたが、二十二日の午後八時五十五分、突如、呼吸困難となり、九時、御遷化されたのでした。

今にして思えば、上人が音頭をとられた身延山における同窓会は、身延山と同窓生に対する今生の別れを告げたことになり、また本妙庵における五十回忌法要は、人としてなすべき報恩感謝の道を万世に垂れるものとなつたのです。

次に、今は上人の最後の言葉となつた、本妙庵における御挨拶の全文を、録音テー

ブから、そのまま再生記述してみましょう。  
なお文中の（ ）は筆者の註であることを、お断りしておきます。

### 12

どうも皆様御苦労様でした。私が本妙庵への参詣の言い出し兵衛で、遠い道を御苦労願いましたが、来てみれば、

（無駄ではなかった）

と、しみじみお互に思うことでございましょう。

また、こうゆう機会もありませんが、今年は、たまたま島恩師の五十回忌に当りますので、昨日もお話しをしましたように、私自身そうでありますか、ここ（本妙庵）は、我々の青春の搖籃の地であり、ここに来て、御説教をしたり、或はお経をあげた

りする、その間に、島上人から聞かされ

「日高君が居る」

いわゆる当時の身延の様子、それから本妙臨師が、元政上人を慕って身延から京都へ行かれ、能勢から再び身延に来られて、ここに醜悟園を嘗まれた当時の話は、全く私は自分自身で考えて、

△自分の信仰を、本当につくってくれたん

という気持ちが失せませんので、

△五十回忌は、ぜひ御塔婆を立てていとなみたい。またこの際（本妙庵山麓・波木井の）農家の入達だけ、お集りを願つて、お経をあげたい

「本妙臨師の御命日に当る九月の十六日に本妙庵の御祖師様を権現閣で開眼して頂いて、ここにお迎えをすることになつており、波木井の部落の人達も大勢集まりますので、その時に一緒に五十回忌報恩の法要をしてもらいたい」

という御相談がありました。

今、本妙庵に誰がいるのかわかりませんので、身延の望月總務さんにお話しをしました所

「本妙庵の内部も、永い間、室住君（身延山大学教授室住一妙先生）のあと、人がおらなかつたので、非常に荒れてもおるし、周囲も草が一ぱい生えていたが、今その整備も、日高君が来てやつておる」

△おいで日高君の方から、  
日おいて日高君の方から、

門寺の御遷座式で、私は行かれません。幸

に十月の五日、同窓の方々が、身延山に集

存します。

御承知のように、宗門も今、非常に重大

まるこことなっておりますが、大体その人達は、島智良上人に教えを受けなくとも、本妙庵を知らない人はおられませんので、その機会に、久し振りで本妙庵へお詣りをして、そこで五十回忌の御塔婆を立てて、御回向をしたならばということで、同窓会

な時に遭遇しております。私共が育った時代と現在とでは、それこそ非常に事情が異つておる為に、法燈相続していくことが容易でないことは、皆さん各自が肌に強く感じておられると思ひます。

御世話人の方と連絡しまして、今日の、この参詣に成った訳でございます。

来てみると、当時の本妙庵の面影はあります。せんけれども、山光水色、周囲の草木悉く、昔のまゝであります。人間のわずかな命から考えてみますと、

いかに常住の姿が尊いか

といふことが、しみじみ感じられる訳で

ござります。お互に、そうして養われた心

魂が、今日の集いになつたことだらうと、

本当に宗門にとっても黄金時代であります。そういう時代に育つた私共の信仰体験を、若い人たちに何とかして伝えていきたく、ということから考えると、この醸培園で、お互いが育つた時代の体験を生かしていくことが、若い人に矢張り、魂を相続してもらう所以ではないか、と考えるのでございます。

いくら戦後の混乱といつても、もう、上

うやく反省期に入つております。一般の人も反省しておりますし、坊さんも反省して

「これではならん」

という空気は、どこへ行つても感じられます。皆「何とかして」と思うけれども、その「何とかして」が具体的に成りませんのが、今色々な形になつておるのではない

か、と思います。

或は青年会の設立、或は婦人会の設立、或は朝参りの復興、というような形で、何とか形の上に現わそうとする苦心が、どこへ行つても、私は感じ取られるのであります。

この本妙庵への、今日の参拝を機に致しまして、度々来ることはできませんけれども、あの本妙庵師が、ここで醒悟園を開いて、いわゆる心迷醒悟、それを顕つて学問

をして、弟子を教えたということは、明かに残っております事実でありますから、この事實を、若い人にも能く知らせて、そして宗門の前途の為に、お互が力を合わせてやりましたならば、まだ燈（アカリ）は消えないのですから、ここで油を足していく時ではなからうか、と考えるのでござります。

幸い、ここには今度、日高君が来て、若い学徒も、ここから学校へ通つて勉強するようだ、本山の方でも心配をしてくれるそ

うでありますから、醒悟園は、どこまでも醒悟園として続いていくことでありますよ

う。

お互に一日も長生きをして、あの黄金時代とまではいかなくとも、今日の宗門を前進させて、いわゆる心迷醒悟、それを顕つて学問

ことに努力したい、と思うのでございます。人に法味を挿げ、墓参をして覚林坊へ帰つ

年の願からいければ、一番先に逝(ゆ)かなければならぬ私ではありましようが、

なればならない私ではあります。お互に健康に注意して、お腹をすかした所で、お屋を頂戴する

年頃をよしまして、お互に健康に注意して、一つ今月は、ここで復活祭をして、青

今日は誠にありがとうございました。

年に還り、少年に還って、道心(童心)を

本当に呼び起し、これをホルモン剤にして解散を致し度い、と思うのでござります。

本日は、地元の農家の方々が肝いりで、手打ちソバをつくって、お昼の供養をして下さるという予定で来たのであります。

今朝突然、ここのお世話人の方が亡くなりまして、わずか十数戸の部落でありますから、全戸を挙げて、その方にかかるつおりますので、おソバは今年はできないそうでございます。また来年の楽しみにしておきまして、ここで本妙さま、並びに島智良上

### 13

上人の御挨拶は、聞く人々の肺腑に浸み通るような、本当にしみじみとした静かな語調でした。然しその中に、ほとばしるような愛宗義法の一念が、くつろわす、にじみ溢れていました。

今、この録音テープを再生してみれば、この御挨拶の言葉そのものに、既に虫が知らせていたのか、残り少なき、みずから命の燈をみつめながら、同窓の各聖、並に志を同じくする人々に対し、今生のお別れを述べられていたのではないか、という

錯覚すら感ぜしめられるほどです。

然し、そうした中にあっても、いや、むしろそりであればあるほど、上人の御挨拶は、詮ずるところ、

「日蓮大聖人によつて、ともされた本化の法燈、末法万年尽未来際にまでも継承し、一廬浮提、燈原の火の如く燃え抜けて行かねばならない此の法燈の、その一燈だに継承することすら、如何に困難な時代であるか」

と云ふことを嘆かれ、

「まさに消えなんとするこの法燈に、そゝぐ油は、本妙臨師が一切衆生の心遂醒悟を願つて醒悟園を開き、みずからも修行し、多くの子弟を養成されたといふ、この嚴然たる事実にもとづいて、その道風を宣揚された島上人が、当時、身延山学園草創時代

の学生であつた我々にうえつけられた心魂を、現代青年僧に伝えて行き、身延山学園の先輩、後輩がともどもに、醒悟園僧風を顕揚することによつて、宗門を前向きにして二歩でも三歩でも前進させねばならない」という実践的悲願に燃えておられた、と拝せられましよう。

なお本妙庵参拝もすみ、波木井の里へ降られる八丁の坂の途中で、おそばにつれていた日高上人に、

「鷺峰会の学生が、身延を中心た宗門布教のため、一生懸命にやつてゐることは、かねがね聞いて嬉しく思つていた。

今度の本妙庵の整理にも、總動員でやつてくれたそりだが、本当に感謝に堪えない今後とも、此以上精進してもらいたい。然し若い者だけでは、運動にも困難な点

が多いことだらうと思うから、我々年輩の者が引き立てたり、カジを取つたりしてやらねばならない、と思つてゐる。

今度の催しは、初めてのことではあるが、今後は、これを慣例として毎年十月六日、本妙庵へ参詣することになったので、ことだけでも、言わす語らすの中に、醒悟園の僧風が、宗門にも顕揚されるようになることであらうし、また、やがて醒悟園を中心とした同志、同窓の集いも出来ることだらう。そして年輩の者の集いと、若い者の集いとが一体になつて、宗門を興隆する時が来るだらう。

だから日高君をはじめ鷲峰会の学生は、本妙庵の僧風を崩さず護りぬいてもらいたい。これだけでも容易なことではない。常人の堪え難い忍苦が必要である。

然しこのことだけでも、やりぬくなれば一燈の燈は、やがて時と共に巨大な燈となつて行くことだらう。

今は巨燈をかゝげるということよりも、まず何よりも、醒悟園の一燈を護りぬくことに専念してもらいたい」

と告げられたそうです。今や、この言葉は、上人最後の遺嘱となつてしまひました。思えば、上人の死は宗門にとつても本門寺にとつても、そして本妙庵のためにも鷲峰会のためにも、惜みても余りあります。後二、三年でもよいから、上人に生きていて欲しかつた、と思わずにおれません。

然し天命は、池上本門寺大堂の完成と御邊座式、そして島上人五十回忌法要と、本妙庵に対する悲願を伝えることによつて尽きたと考えるならば、上人の最後は、まさ

しく本化妙門としてふさわしき大往生とな  
ふえられましよう。

この話を聞いた鷲峰会賛助会員でもあら  
れる名古屋駄菴前香取旅館の西村みささんは  
「伊藤貫首さまの御魂は、きっと本妙庵に  
も来ておられることがあります。そこで毎  
年十月六日には、鷲峰会そろって、貫首さ  
まへ御回向申上げ、貫首さまの悲願が、一  
日も早く達成されますよう、より一層努力  
して頂きたいと思います」

と申されていました。

ちなみに伊藤上人の法号は、慈光院日定  
上人。行年七十二才でした。

(おわり)

くだきし骨の  
何故に  
名残りぞと

思へば袖に

玉ぞ散りける

草山元政和尚  
祖山御真骨堂に詠す

久遠の本仏と  
人間釈尊

その 1

日高白象

かねて私は、

1

「法華經二十八品の經典中、靈山虛空會上において、多寶如來と二仏並座されながら本門の八品を説かれている人間釈尊こそ、久遠実成の本仏そのものであられる」

「日蓮大聖人が図顯せられた大マンダラはこの靈山虛空會上の儀相を、そのまま現わされたものであるから、大マンダラ中央のお題目の左腕に觀請されてあられる南無釈迦牟尼仏というお釈迦さまこそ、久遠実成の本仏そのものにほかならない」

「通常、お釈迦さまは衆生救濟のため、仏界より人間界に應現されたといわゆる應身仏である」といわれているが、結論的にはそういう見方も成り立つにしても、実は人

間釈尊が、みずから修行によつて、みず てもならない。

から本仏の境界を証得され、本仏そのものとして本仏の内証仏法を、我々一切衆生救濟のために、十分も漏らすことなく、色香も變えず、法華經として説き尽されたのであるから、この法華經を信奉する限り、こうした人間釈尊こそ本仏本尊として仰ぐべきである。」

「従つて、釈尊が既に久遠の本仏であられる以上、たとえば屋上に屋をかさねるようにな、インド・アーリヤン人ゴータマ仏陀・人間釈尊の上に、或はその奥に、更に久遠の本仏といふ不滅の靈格を想定する必要もない。されば、またそういう考え方をしてならない。或は人間釈尊を本仏とみなすからといって、法華經本門八品以外の座における人間釈尊をもつて、直ちに本仏とみなしきである。」

釈尊八十年の御生涯の中でも、たゞ八品を説かれている時の人間釈尊、それをそのまま久遠実成の本仏と仰ぐ仏陀鏡、そこに法華經の眼目があり、そういう仏陀鏡こそ日蓮大聖人の本尊觀にはかならない」という考え方をいたしました。

そしてこのことを、折にふれては人々にも語り、或は總本山発行の「みのぶ」という機關紙上にも、公開の機会を得たいものと願つては、年を久しく述べてきました。

然し、現在の日蓮門下各宗各派各教団の中では、日蓮宗はいうまでもなく、人本尊だの法本尊だの、或は人法一体の本尊觀だの、本尊表現形態の優劣論だの、本尊についての議論まさしく沸騰しており、そういう火中にあって、無位無官、一介の野僧に

も等しい私の如き者が、總本山の機關紙上に、かくの如き所見を公開発表するということ 자체、なかなか容易なことではあります

せんでした。

私が数年間「みのぶ」教報を編集してい

た時代であっても、

#### 「尊定の本尊と本化の信」

と題して、私の本尊觀を連載公表中、いよいよ じよこれから本筋に入らうとした時でさえ、四畳の状況から、連載を中断せざるを得ない状態に至ったほどでした。

それは、總本山の機關紙上に、このことを公開すれば、その所見が、たとえ私個人のものであつたとしても、ひいては總本山の主張そのものとみなされてしまう、といふ恐れが多分にあつた為でもあります。こうして私の紙上公開の機会は、何時に

なっても得られないまゝ今日に至つてしましましたが、然し願りますれば、この間釈尊に対する私の考え方、則ち私の仏陀觀現尊本仏觀なるものは、全月と共に煮つめられ、沸騰して行き、特に今年に入つてからは、その論調も烈しきを帶びて、たとえば春五月の日蓮宗第一期信行道場においても、春夏二期の身延山青年行学講習会においても、その他の講習会、研修会、或は各地における身延山街頭布教中においても、

#### 「釈尊に帰れ」

というスローガンのもとに、何時しか、日頃の本尊觀がほとはしり出ており、わけても北九州における、福岡県日蓮宗青年会の主催した教学研修会の席上では、終始この一事の主張をつらぬいていたほどでした。幸い「驚峰」の本誌上、学生街頭布教の

紀行概要が掲載されるに当たり、北九州方面も併せて究明してみたい、と思うものでの読者の要望もあって、北九州数学研修会において講演内容を公開する機会に恵まれました。

そこで、さっそく、その時の講演内容を誌上忠実に記述すべきでありましょうが、思えば折角の機会ですから、お釈迦さまがみずから久遠実成であることを宣言された聖典・法華経の如来寿量品、その中でも特に自我偈を文拠として、これを中心に、「久遠の本仏と人間釈尊」

「本仏釈尊と地涌の菩薩」  
「本仏釈尊と顛倒の衆生」  
「本仏の仏界と火宅の三界」「本仏釈尊の久遠の悲願」というように項を追って広く講述し、その中に「日蓮大聖人の本尊觀」というもの

も併せて究明してみたい、と思うものです。

これは、いふかえれば「自我偈の講義」ということになるわけですが、といって今まで出版されている自我偈講義という類の書物のように、単なる経文、字句の解釈に留まることなく、むしろ達意的に自我偈の文上文底、そしてその行間に溢れている思想をたずね、この自我偈講義を通して法華經全体の教理概要も、出来れば理解されるようになります。

もとより、これが自我偈講義の決定版であるなどとは、毛頭だに考えておりません。一求道者のさうやかな所見にすぎないものであり、これを公開発表することによってもたらされるであろう十万の読者の、種々なる反響・御意見・御叱声によつて、今後

とも、より更に自我偈を研鑽しつゝ、眞と申されていますが、如來壽量品の万教の仏意にふれて行きたい、と願うものです。に卓絶した尊さは、独り日蓮門下だけでない一般読者には出来るだけ解りやすく、古来、インド・中国・日本の三国を通じて御了承を願つておきます。

自我偈講讀の初當、今一度ふりかえって後段の偈頌とに分れ、後者の偈頌が通常自こうした機会の与えられたことに対し、我偈と呼ばれているものですが、法華經を心から甚深の感謝を捧げるものです。

この如來壽量品の構成は、前段の長行と

信仰する人々の中では、前段の長行の經文は知らない人も、自我偈を知らない人は殆どないといつて良いくらいであり、文字も読めない無学文盲の老人でさえも、口うつ

しに自我偈だけは暗誦しているほどです。

「お釈迦さまが説かれた八万法藏という慶大な一切經の中でも、一番肝心な經典は法華經であり、法華經一部八卷三十八品の中でも、一番肝心なものは第十六章の如來壽量品である」

## 2

さて、

それほど自我偈は、日蓮門下のすべての人々に、尊ばれ親しまれています。朝夕の勤行の時でも、自我偈だけは必ず読み、回向供養の時でも祈願祈禱の時でも、きっと

て自我偈は説誦されています。人によつて  
は、自我偈を何十巻も何百巻も、千巻も万  
巻も繰り返し、繰り返して説誦することも  
あるほどです。

ところが、それほど尊ばれている自我偈  
でありながら

「その經文の中には、一体どういうことが  
説かれているのか」

ということになると、上ほどの専門家で  
もない限り、これまた殆どの人が知らずに  
いるような有様なのです。

意味も判らす、朝に夕に、毎日毎日ジャ  
ブ／＼ジャブ／＼自我偈を読んでいる、し

かも何人かの人々でなく、日本宗教界中、  
最大の勢力を擁する何千万という日蓮門下  
各宗各派各教団の人々の殆どまでが、既に  
そうであるということは、まことに不思議

な現象でもあります、然し実際そういう  
不思議なことが、不思議ともされずに行わ  
れています。

勿論これには、日蓮大聖人みずから仰せ  
られている通り、たとえは食物にしても、  
たとえその料理法は知らなくても、食べた  
味にも香りも栄養にも何ら變りはないよう  
に、また薬にしても、たとえその処方は知  
らなくても、のんだ薬の効能に變りはない  
ようだ、自我偈にしても、たとえその意味  
は知らなくても、受持・説誦するという信  
と行さえあれば、利益には變りはないもの  
であります。

たしかにそうです。なまじつか、經文の  
意義を研究し始めて、却つて疑惑を起すよ  
りは、はじめから理論も理屈も、何も知ら  
ない方が、むしろ迷わず信仰も強いのです。

然し、この場合、法華経の教理にも明い

「家内安全、家運長久」

行学兼備の指導者が必要です。若し、そういう指導者がなかつたならば、もともと教理教学も知らないでいる人々は、あたかもカニが甲羅にあわせて穴を掘るよう、その人はそのなりに、法華経を自分勝手に自分の都合のよいように解釈してしまい、機根低劣である場合、強盛に信仰すればするほど、却って低級な、曲った信仰へ堕ち入つてしまい勝ちです。

甚しい場合は、本尊が久遠実成の釈迦牟尼佛であることも知らず、お題目が本仏釈尊の因行果徳の二法であることもわきません、まして仏智見の道に入ることなど眼中にもなく、もつぱら、

「病気がよくなりますように・・・」「商売が繁昌しますように・・・」

といつたような「イワシの頭も信心」というが如き、我欲一点張りの俗信仰に低迷していく、みすからには低迷していることにも気付かず、むしろ、そういう信仰得意として、法華経を讀えながら却って法華経を誹謗しているということです。知らないとはいはいいながら、そういう信仰者が何と多いことでしょう。

そこで宗門七百年來の學則にも、

「給仕第一、信行第二、學問第三」

とありますように、三宝給仕を第一とし強盛な信仰実践の上に、更によき指導者・よき指導書によって、教理に対する理解を深めて行くようにならねばなりません。

宗門の學則に「學問第三」とされているからといって、學問を輕視したり、無視し

てよらとうのではないのです。

現代は、七百年前の日蓮大聖人の時代と  
違い、国民の学校教育も進み、新聞を読め  
ない者は殆どなく、出版技術も発達し、活

字は書簡（こうかん）にあふれています。  
こうした時代にあって、鎌倉時代と同じ  
ように、なお信仰教理に対し無関心な状  
態であるということは、むしろ笑止の沙汰  
とでも申せましよう。

昔の僧侶は、漢文になれていたため、經  
文を真読で、棒読みに読み下しながらも、  
訓読で読むのと同じ理解力をもっていました。  
た。訓説より真説の方がスピードがありま  
す。ですから絆意を理解するにしても、訓  
説よりスピードのある真説を用いるのが常  
とされていたのです。

読が読みずらくなり、上ほどの訓練を必要  
とするようになってきました。なお時代が  
下るに従って、訓説でも絆意を理解していく  
となつて来ました。

その上、經文は難しい、難解難入という

潜入観もあって、たとえ適当な經典解説書  
が出版されても、なかなか普及せず、理解  
もされない經文を、たゞ有難い、有難い、  
とばかりに読み重ねては、遂に思想なき信  
仰へ堕ち入っているのです。

思想なき信仰、それは底級な個人的利益  
の追求となつても、社会に貢献する力は乏  
しく、まして世界を指導する宗教となるこ  
とが、平仮名が普及して来るに、真

とは出来ません。

折角、万教に卓絶した法華經を信じ、そ  
の肝要である自我偈の説誦を主としている

何千万という日蓮門下の人々がいるのです

から、そういう人々が、ひとたび經文教理  
を思索して、その文底に流れている其の仏

意にふれようと努力するならば、そのこと

自体、他の宗教はいうまでもなく、すべて  
の主義・思想をも開闢する大いなる社会思  
想運動となつて展開されることでしょ

そして、この經典をして人生の指導書、  
国家社会乃至は世界全体の指導書として  
の權威を、遺憾ながらしめて行くことでし  
よう。

3

さて自我偈は、その冒頭第一行の文より

未曾有の大問題を展開しています。文とは

自我得仏米 所經諸劫數

無量百千万 億載阿僧祇

我れ仏を得てよりこのかたへたる

所のものもろの劫数、無量百千万、

億載阿僧祇なり

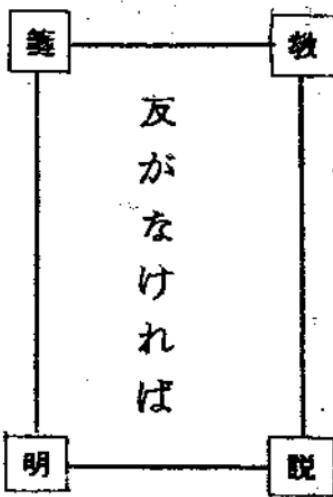
ということですが、この文の中に、久遠  
の本仏と人間釈尊との關係について、

「久遠の本仏が、人間釈尊となつて應現さ  
れたのか」

「人間釈尊が久遠の本仏たることを體現さ  
れたのか」

という未曾有の大問題が、はらまれてい  
るのです。

( 以下次号 )



若し善き人を

友とすることが出来なければ

征服せし国を棄てたる王者の如くに

森の中の象王の如くに

独り行くこそ、よりれ

悪しき人には

友とすべき資格なければ

敢えて友を求める

友なきまゝに

独り行くこそ、よけれ

森の中の象王の如くに

善き友とまじわれ  
友がなければ孤独を守れ

☆

お釈迦さまは法句經（ほっくきよう）とい  
う経典の中で、次のように教えられてい  
ます。

善き人と交わりて

悪しき人に親近せられ

「類は友を呼ぶ」

という言葉があります。また、

「牛は牛ずれ」

という諺もあります。

これは、人と交わる上において、最も注意しなければならない言葉の一つです。何となれば

「朱に交われば赤くなる」

という諺もあるくらいですから。。。



人は、なかなか孤独に堪え切れないものです。悲しきにつけ、嬉しきにつけ、必ずそれを人に知つてもらおうとします。また、どんなにくやしいことがあってもそのくやしさを幾分でも、人から認めてもらいうと、気が晴れるものです。

それは、人の心の奥底に、自己の存在を主張し認めさせようとする「我」の一念が、根強く潜在しているからであります。

この一念のある以上、言つてはならないことも、つい言つてしまい、友とすべきでない人でも、つい友としてしまい、みずから求めて朱に交わり、何時の間にやら赤くなるものです。



ものは縁によつて変ります。良い種子でも、悪い天候、悪い肥料、そういう悪い縁にあれば、とれる実もそれなくなります。たとえ悪い種子でも、良い天候、良い肥料そういう良い縁にあれば、予想外の収穫となるものです。

人間環境の中、最も大きな影響を与える縁が友達です。友は選ばねばなりません。

若し、善き友が得られなければ、敢えて友を求めず、森の中の象王の如くに、独り行くことが出来れば、これに超したことはありません。

然しそれには、自分を認めてもらおうと

いう「我」の欲念を棄てることです。あたかも王者が、一旦、征服した領土を惜しみなく棄てるように。

て迫害されても、天の星と語らい、地の花にさゝやき、目に見えない十方法界の諸仏経文と、朝に夕に常に交わっているのですから。。。

☆

善き友と交わりましよう。善き友の中、最高の友というものは、同じ正法を信じている人のことです。

その友が、今はなくとも、みずから象王の如く、獅子王の如くにしてあれば、法を縁として、何時しか友は歩みよつて来るものです。

二人三人、五人十人、数は少くとも、正法を本とした集い、地涌の僧伽が、文字通り大地より涌き出するが如く、形成されて来るのであります。法を信ずる人は、そういう未

遊行無畏　如獅子王

正法をたもつ人を、法華經では、  
「遊行無畏　如獅子王」

遊行して畏れなきこと  
獅子王の如し

と讀えています。正法をたもつ者、法華經を信仰する人に孤独はないはずです。たとえ、すべての人々から認められず、却つ

来てを確信しています。

# 北陸・関西・九州 街頭布教紀行

## その1

これは去る7月22日身延山を出発してより8月12日旧盆直前身延帰山するまで夏休みを返上した学生の、3週間に亘る布教紀行の概要である。

### 編集部

### はじめに

秋深く、身延全山の紅葉も散り始め、朝夕の寒さ、肌にしみる季節となって、今さら真夏炎天下の街頭布教紀行を述べるとは時機を逸した譏りもまぬがれないが、それでも身延山学生の、休暇まで返上した実践布教の一環として、記録上にも、あえてこれを記述しておきたいと思う。

実は、このたびの布教は、昨年の夏休み関西方面（愛知・三重・奈良・大阪・兵庫）一府四県の街頭布教を実施した折、和歌山県の宗務所長より、

「次は和歌山県へも布教するよう」  
と要望されていたことと、大阪方面よりも、「毎年一回は、大阪布教に来るよう」  
と要望をうけていたこと、ならびに今年

の春頃、北陸方面より、

二十五日

魚津市・本隊身延帰山、

「この夏には北陸路にも来てもらいたい」

七月二十六日

別動隊は関西へ

という懇請があつており、更に六月、福

二十七日

高野山（真言宗總本山）

岡県日蓮宗青年会の中より、

二十八日

大阪市

「今年正月の九州街頭布教は、大へん成果的だつた。夏には日高上人を中心講師として、一泊二日の教学研修会を開きたい」

二十九日

大阪市生野区

という申出があり、これにあわせて、

三十日

阪南五市（和泉府中市・

「久留米でも講演布教を・・・」

三十一日

堺市

という要望があつていたことにより、北

陸三県へは布教本隊、関西と九州へは別動

隊が出動する、というように企画されたものである。組まれたスケジュールは、

北陸三県

七月二十二日

身延山出発

八月三日

四日五日 北九州市

一十三日 福井市・金沢市

六日 直方市

二十四日 高岡市・富山市

九州方面

九月～西下

八月三日

和歌山市

四日五日 北九州市

七日八日 久留米市

九日十日 佐賀県

十一日

福岡市

十二日 身延帰山

方面より、

「市内の布教、支障なし」

なお本隊の編成は、岩間布教部長・長谷川教務部長・ほか山務後職員九名・布教研修所六名・身延山大学高校生有志三十三名

計五十名。布教車一台・大型バス一台。

別動隊の編成は、岩間布教部長・長谷川教務部長・日高布教主任・ほか学生有志十

二名。

身延をあとに

それだけに七月二十二日午後三時、身延の三門前に集合した隊員五十名の、一人一人の顔面には、たゞならぬ緊張感がみなぎっていた。

午後三時三十分、身延町民の見送る中、

布教車・大型バスの順で三門を出発。富士川にそって東海道に出、午後五時静岡を通過、夕日の沈む浜名湖畔で小憩、夜十時名古屋の熱田神宮につき、米原を通過したのが北陸一円に亘る集中豪雨の被害が続々と報道され、関係者一同、北陸方面における布教実施の可否が、鳩首案せられたが、各

出動準備を急いでいる頃、新聞やラジオテレビで新潟地震の被害、つづいて起つて北陸一円に亘る集中豪雨の被害が続々と報道され、関係者一同、北陸方面における布教実施の可否が、鳩首案せられたが、各

予想外に早く現地へ入ったため、夜の明けまるまで、道端に車を止めて仮眠。やがて東天白む頃、集合地である福井市東日出町の妙長寺へ向った。

### 福井市

妙長寺の山門をくぐったのは、予定より二時間も早い午前五時。住職山内是明上人に迎えられ、本堂で朝勤、書院で朝食の供養を行う中、福井県北部宗務所長加納文明師をはじめ管内寺院各聖、檀信徒がぞくぞくとつめかり、七時より本堂で加納所長

災にあい、戦後の復旧中、昭和二十三年、例の福井大地震に見舞れたが、今はその爪跡もなく復興していた。

然し北陸縁は、親鸞・蓮如が弘めた念佛の地盤、特に本願寺派の財庫といわれており、福井県には曹洞宗の總本山永平寺があり、創価学会も少くはない。

勢い、街頭の要所要所における街頭説法の内容は、念佛・禪を開会し、学会を折伏しつゝ身延を本とする日蓮大聖人の立正安國精神を獅子吼し、世界平和実現の要諦に及んだ。

午前九時、既に日は高く、擊鼓する隊員の頬には、淋満（りんり）と汗がしたゝるなりに、堂々三百名を越ゆる市中擊鼓唱題の大行進にうつった。時に午前八時。

福井市は江戸時代の城下町、戰時中、戦中に瀕るゝ足羽阿原に到り、ここに設けら

れた祭壇の前、福井大地震犠牲者十七回忌  
慰靈法要を厳修。遺族の涙を新たにした。

これより寿町へ向ったが、行動を起して  
より既に二時間、炎天下、寸時も休む暇も  
ない延々たる大行進に、参加した人々の中  
には、さすがに疲労の影も認められないで  
はなかった。

然し「この時ぞ」とばかり、一人の落伍  
者もなく、日蓮宗の宗風を慰懃なく宣揚し  
終着地点本法寺に到着。時に午前十時三十分。  
本法寺は布教隊学生山田英美君（学一）  
の出家寺。師僧藤田行学師は遷化されて日  
もまだ浅い。謹んで法味を供え、こゝで始  
めて喉をうるほし、門前待機中のバスに乗  
車。見送る信徒の擊鼓唱題の中、別れを惜  
みつつ、金沢市へ向った。

金沢へ出る途中、福井県坂井郡三国町の  
妙海寺に参拝。こゝで住職石谷海学師の心  
尽しの、昼食の御供養をうけたが、食後の  
スイカに涼味満喫。

これより再びバスに乗り、同じ町内の東  
尋坊妙信寺住職岩本妙信法尼の室内で、妙  
信寺を参拝。

北陸の名勝東尋坊の景観は、妙信寺の境  
内の如く、庭前にそゝり立つ数丈の奇岩絶  
壁には、渺茫たる日本海の怒濤が、高々と  
白波を打ち上げていた。

東尋坊の由来を聞けば、昔、平泉寺の僧  
坊に怪力の惡僧がいた。見るに見かねた人  
々が、惡僧に酒をのませ、酔いつぶれたと  
ころを、この岸壁から突き落した。

### 三國・東尋坊

ところが、それからといふものは、悪僧。前にも述べたが、それまでになるには、蓮の怨靈によつて海が荒れ、怪異が起つた。如の足には、大きなワラチダコが、いくつそこで人々は言つた。

「念佛を唱うれば西方淨土へ行くといふが

この悪僧は西方淨土へ行けず、東を尋ねて行つたのだろう」

と。そこで、この地を東尋坊と呼ぶようになつたといふ。もともと東を尋ねても、西へ往つても、淨土はない。淨土はお題目を唱える当所にしかないと云つた。

今日、日蓮講下の中で、スワリダコの出来るほど唱題修行をしている者が、果して何人いるだろうか。クツダコの出来るほど布教に歩いている人が、幾人いるだろうか。木劍タコの出来るほど修法に専念している人が、何人いるだろうか。

さて、この日、午後二時三十分から石川県金沢市の街頭布教。そこで二時までには発進地点、寺町の立像寺につかねばならない。バスはスピードをあげた。

北陸は念佛の牙城である、ということは、六日より始めた鎌倉由比ヶ浜、海中一百日

### 金沢市

の荒行を成満し、房州の靈跡をめぐり、身延に詣で、更に佐渡の靈跡をめぐって能登半島に上り、帝都開教へ赴く道すがら、こゝ北陸地方を遊化したことが始まっている

といふことである。

・・・そこから寺は、おのずから建てられて行く。

さて金沢から、およそ十キロ西方に松任（まつとう）といふ町がある。ここは、

朝顔につるべとられてもらい水

と歌った有名な加賀の千代の出生地。そこまで出迎えに来られた石川県第一部宗務所長桐谷詮庵師ほか数名の方々の誘導で、所定の時刻に立像寺に到着すれば、障幕を張りめぐらした山門内の境内には、既に境地檀信徒が、加賀檀信徒協議会という捕いのタスキをかけてひしめき、擊鼓して布教隊を出迎えた。

管内寺院各聖は、いずれも手甲脚絆。役員は携帯マイクで人員の整理。まさに大行動の起らんとして、ものものしい緊迫と興奮が、熱氣の如くみなぎっていた。

桐谷所長の挨拶について加賀檀信徒協議会長は、

「待ちに待った身延山布教隊が遂に来た。

これから当地未曾有の市中鼙鼓大行進が展開される。これほどの栄光と感激は又ない。今日一日は一切を忘れ、日蓮宗々徒として宗風を宣揚しよう」

と力強く激励。日高主任の鼙鼓一閃、数百の隊列は二列縱隊、白バイ數台の誘導のもと、玄題旗を陣頭に、加賀百万石の城下町、北陸第一の繁華街へと向った。

真夏の午後の太陽はギラギラ輝き、目に

午後の五時。

山大奥主事の大場師をはじめ、学生隊は交互にマイクをとり、創価学会の邪道を折伏すること、火をふくよう。数条の赤旗をかゝげて会館広場に集つていた労組の一団が、一心に耳をかたむけ、盛んに拍手を送っていた。

これより兼六公園の下を左へ曲り、金沢

大学にそって電車通りへ出、繁華街の要所では次々にマイクをとり、延々二時間半に亘る大行進。教義およそ一万枚を配布して、高道町の宗務所全性寺についたのは

しむ汗は、鼙鼓する身に、ぬぐういともしない。数百の鼙鼓は市街をゆすぶり、市民は街路の左右に人垣を造る。さっそく新通り、現地寺院役員の案内で卯辰山に登った金沢の市街を眼下にしながら、つづら折り・テレビの報道陣が、カメラの砲列を敷く。

獅子吼第一声は観光会館ビルの前、身延

つづいて全性寺本堂では岩間・長谷川両部長の講演会と座談会。学生隊はバスに乗り、現地寺院役員の案内で卯辰山に登った金沢の市街を眼下にしながら、つづら折りの坂を登山つめた山頂には、巨大な日蓮聖

人の大銅像が聳えていた。

次は金沢城趾に隣りする兼六公園の見学。布教に疲れ切った学生の耳には、ガイドの声も聞えない。天下の三大名園の一つとうたわれた兼六公園は、もと藩主の庭園、代々の藩主が丹誠をこらしたものというが、疲れた学生の目には、たゞ人工的な樹木と池があつただけ。

その夜、両部長は全性寺に、本隊は立像寺に宿泊、北陸布教の第一夜を明した。

立像寺は、近代日蓮宗学の鼻祖とうたわれた優陀那院（うだいん）日輝和尚が、開山龍華日像上人以来の法燈を継承住持され、多くの子弟を養成して、こゝで入滅された名刹。お墓は山門を入って左側にある。宿泊中、住職福井清秀師より立像寺の歴史と優陀那和尙の伝記についてうけたまわ

り、更に和尚の直筆として唯一のものであつた。特別に拝観させて頂き、一層感銘を深くしたものであるが、こういう御縁にあえるのも、身延山衝頭布教のおかげと、しみじみ思つたことだった。

なお、これを機会に優陀那和尚の伝記を本誌上にも紹介したいと思うが、和尚の一代は、睡悟圓本妙庵とも深い関係があることなので、次の機会に別稿として記載したい。御期待を乞うるのである。

### 高岡市

さて翌る七月二十四日午前八時、立像寺を出発。数丁先きの妙立寺に参拝。こゝは忍者寺・カラクリ寺として週刊誌に紹介されて以来、有名になつた寺。

住職張田瑞孝師に案内されれば、本堂も広場で獅子吼第一声を放ち、堂々の街頭行庫裡も全部カラクリ仕掛け。殊に本堂は外見進を展開。片原町商店アーケード街を文字通り氣もない普通の寺であるが、内は七階通り擊鼓にゆする。

造り。しかも各階みなカラクリとトンテン返し。複雑きわまる仕組みで、案内がなれば迷路に入ったよう。建物も音のまゝであるが、庭の井戸は金沢城に通じていた

市民は、降って湧いた大音響、そして始めて見る身延山布教隊の大行進に、肝をつぶしたり感嘆する。新聞記者が追って来た。間もなく妙国寺（住職昇塙清研師）に到着。休む間もなく本堂で岩間・長谷川両部

金沢を発つて国道八号線を富山県へ向う途中、俣利伽羅（くりから）峠にさしかかった。ここは木曾義仲が夜陰、角に松明（たいまつ）をつけた牛の大軍を放つて、平ノ維盛の大軍を破った古戦場。

峠を下れば、広々とした富山平野。高岡市は「北陸の大坂」といわれた商業都市。

妙国寺を出発したのは午前十一時二十分。こゝまで出迎えられた富山市本証寺住職桜栄鍊静師の誘導で、一路富山市へ向った。

一時間の行程で午前十時、高岡駅前に到着。待機していた現地寺院檀信徒と合流。駅前

富山街頭布教の発進地点は、梅林町の立

## 富 山 市

像寺。住職は富山県宗務所長松村文光師。こゝは金沢の立像寺と、その名も同じく龍華日像上人の開かれた寺。

「身延山布教隊来る」  
バスが門前に到着すれば、道路に面して、

「身延山布教隊来る」  
バスが門前に到着すれば、道路に面して、

と、大きな立看板が立てられており、立錐の余地もないほど、つめかけた境地寺院檀信徒は、境内狭しとをふれていた。その数およそ三百。

まず本堂で長谷川部長の創価学会破折の講演があった後、直ちに隊伍を整え、市中大行進にうつった。時に定刻の午後二時。

市街には三十六メートル幅の道路が縱横に走っており、行進に支障はないにしても折から風が強く、玄囲旗手は旗を風に取られまいとして懸命だった。

梅沢町・梅沢町・西町を経、総曲輪

(そうがく)町のアーケード街をすぎると、やがて富山城の天守閣が見えて来た。

松村所長の令息が、望遠カノンで天守閣を背景に、しきりに布教隊の行進を撮影していた。

さて富山市街における街頭説法の第一声は、富山城の正面に当る市民会館の前。鑼鼓の大音響に驚いた人々が、会館の窓という窓から、鋭なりに顔を突き出し、また丁度、何かの催しもの終った直後であろう、青年男女の一団が、どつと会館から溢れ出布教隊を物珍らしげに、遠巻きに眺みながら、熱心に学生の説法を聞いていた。

一人の学生が、宮沢賢治の「雨ニモマケズ」の詩を静かに朗誦し始めた。そして本誌二月号より連載したこともある「デクノボウの祈り」の調子で、詩の説明を続けた。

これは騒衆にうけた。まるで演出してゐるかのような効果があった。万雷の拍手が幾度も起つた。説く者も、聞く者も、すべて人々が顔を紅潮させ、一つに触りあって

賢治の深い祈りにひたつてゐた。

その学生が、玄題一唱をもつて説法を終つた時、人々は、まだ説法に浮かされていられるかのようだつた。数秒、時間が止つたような沈黙があつた。何処かで拍手が起つた。するとその拍手は、嵐のような拍手と変わつた。拍手は暫し鳴り止まなかつた。

思うに、説く者も聞く者も、お互に青年であるという共感から、こうした雰囲気がたくましく、しかも急速に盛り上つたのである。しかし珍らしいケースであった。その後、行進は中央通りのアーケード街

・東四十物（ひがしあいもの）町・堺町・五番町等々の繁華街を通過し、午後四時、立像寺に帰着したが、時間にして丁度二時間に亘る布教であった。

立像寺の隣りには、広貫堂といふ薬草会社があつた。越中富山（いんごんだん）といえば反魂丹（はんこんたん）というように、富山には製薬会社が大小百八十社、その中でも一番大きいうのが広貫堂。布教終了後、「折角の機会だから」というので現地寺院の案内で見学に行つた。

広い応接間に通された。やがて挨拶に重役が出て來た。すかさず誰かと、

「玄題三唱」

と号令かけた。隊員五十名、街頭布教できたえた声で、ガラス窓もビリビリするほど大音声にお題目を唱えた。これには重役

も驚き、思わず合掌、深く頭を下げていた。爾来、置薬は「先用後利」といって、薬このためもあるまいが、後で、「おみやげに・・・」と六神丸その他の薬の入った包みを、一人一人もらつたが、この薬が、後日の布教に非常に役立つた。

ちなみに富山の薬は、今より約三百年前富山の藩主前田正甫公（一六四四—一七〇）から始まっている。

天和年間（一六八一—一六八三）前田公

が薬草園を作り、薬草を領民に施していた。

元禄三年（一六九〇）前田公が、江戸城

での席上 同席の秋田侯が、急病にかゝつて瀕死の苦しみを始めた。そこで前田公が

持參の反魂丹を与えると、たちまちにして

快癒したので、秋田侯が反魂丹の全国行商

販売を要請したことにより、富山の置薬（

おきぐすり）が始まったという。

反魂丹のお先き棒をかわぐわけではないが、なお前田公が富山の売薬について残して「大名訓」という面白いものがある。たるところである。

一 利を求めてはならない。  
二 薬に偽りがあってはならない。  
三 薬を売るより人を売れ。

考え方させられる言葉ではあるまい。

その夜、布教隊は本証寺に一泊したが、こゝの本堂は昨年六月、法主猊下大導師のもと盛大な落慶式があつたばかり、木の香も新しい。

然し、昼間着用した白衣は、昨日と同様

汗のため、まるで雨に打たれたようになれて、乾く暇もない。隊員が、身延より用意して来た代りの白衣に着替えている時、身延の法主様下より電報が入った。

「連日の健斗を謝し、道中無事を祈る。法主日静」

隊員はドツと沸いた。

### 魚津市

明ければ七月二十五日（土曜）、早朝六時三十分、本證寺を出発。行進して大法寺（住職草野寛正師）を参拝。立像寺に別れを告げ、門前よりバスに乗り、同じ県内の魚津市へ向った。

誘導のため同乗された魚津市真成寺住職谷川寛徳師の説明によれば、魚津はシンキ

ロウで有名であるが、これは黒部川と常願

寺川から流れる雪解け水の作用で発生するものという。従って春先までなければ見ることは出来ないが、この土地の人でも、いまだ曾って一度も見たことのない人は多いということだった。

富山を出発して丁度一時間、魚津についたのは朝七時四十分。町は漁師町とは思えない近代的な商店街。その入口には真成寺の檀信徒が、およそ百名ばかり、揃いのタスキをかり、鞆鼓しながら待機していた。

いよいよ北陸地方最後の布教、隊員の打つ太鼓の書きは、ひときわ冴えた。かれでお題目の声には、一段と力がこもった。白の脚絆、白の地下タビに固めた足並みは一列縱隊、絵のようにビタリビタリと揃って行った。

早朝のことって、表戸を開けたばかりの

商店街の人々は、時ならぬ大行進に、目を  
みはるばかり。

金屋町・中央通り、そして真成寺町を行  
進して真成寺につけば、一足先きに、再び  
法主猊下より電報が入っていた。  
「各位の法要を讀え、更に有終の美をもつ  
て帰山せられんことを祈る。法主日静」  
隊員は勇氣百倍「最後まで氣をゆるめず  
頑張らう」と誓いあつた。

本堂では、さっそく満堂の信徒に対し  
岩間・長谷川両部長、つづいて日高主任の  
講演が始まつた。  
聴衆の中には、本堂の一隅に、黒衣の禪  
僧が端座していた。禪憎は、みじらぎもせ  
ず聽き入つていた。

岩間部長の論旨は、菩薩行の実践に終始  
し、長谷川部長の論旨は、創価学会の折伏

に貫徹。そして日高主任の要旨は、かかの禪  
僧を意識してか、「禪天魔」とは言わずと  
も、日蓮大聖人の本仏釈尊本尊觀を主体と  
して、禪の破折開会に及び、更に宗派を超  
えて、インド・中国・日本というアジア  
三国仏教の統一こそ、世界平和の道である  
とし、その具体的な実践方法に論及されて  
いた。

日高主任の講演中、本隊は身延帰山の途  
についた。といふのは、魚津から新潟県の  
直江津を通り、長野県を縦断して、今夜半  
までには身延に帰りつかねばならないから  
である。途中、先日の集中豪雨のため、交  
通困難な所も予想される。帰りのバスも容  
易でない。

午前九時二十分、バスが真成寺門前より  
発車する直前、岩間布教部長は、後に残る

別動隊学生を集めて言つた。

「我々本隊は先きに出発する。君たち別動

隊は、これから更に、大阪に和歌山に、遠く九州まで進転する。スケジュールはギ

ッシリつまっている。日数は、これまでの数倍もある。連日の炎天下、さぞ疲れるこ

とだろう。然し身延山布教隊の襟度を忘れず、どうか最後まで、健康には、くれぐれも注意して、お互に助けあい、励ましあつて、やり通してもらいたい。

私も、本隊を身延に送りつけたら、直ちに君たちの後を追つて行く。頼むぞ、しきりやつてくれ」

力強く激励する部長の眼頭には、心なし  
かキラリツと光るものがあった。別動隊の  
学生にも、胸にジイーンと来るものがあつた。別動隊は太鼓を打つて見送った。本隊

熱井は延々と続いた。終りそうな気配す

の者は、出て行くバスの窓から、しきりに手をふつた。

「しつかりやつて来いよ」

と本隊学生、

「気をつけて帰れよ」

と別動隊学生。劇的な光景だつた。

学生の双肩には、淡い一抹の淋しさと共に、  
布教本隊の分の責任感までも、どっとか  
つて来るような思いがした。

## 大 阪 へ

本堂では、ますます白熱化するような日  
高主任の獅子吼がつづいていた。聴衆は喰  
い入るように、講師をみつめながら傾聴し  
ていた。

らない。大阪へ向う「きたぐに号」列車の  
魚津駅発は午前十一時三十分。タイムを知  
らせて、ようやく講演が終ったのは十一時  
チャスト。発車まで後三十分しかない。

荷物は山のよう、本隊より申しうけた二  
流の玄題旗、二台の携帯マイク、梱包した  
教箋、関西寺院に貸与する十人分の網代笠  
とウチワ太鼓、着替衣の入った隊員各自の  
頭陀袋・・持ちよらないそれらの荷物は  
直ちにタクシーで駅まで送り、隊員は山主  
御令息の案内で、革鼓早足、駆へ急いだ。  
駅まで二十分、ついた時には汗が白衣を通  
して蒸發までにじんでいた。

谷川師をはじめ総代世話人の方は、タク  
シーで見送りにかけつけられた。荷物をも  
つてもらってプラットホームに出、こゝで  
別動隊の点呼をとつた。

身延山布教師

日高白象（福岡県出身）

身延山大学三年

和田龍昌（大阪府出身）

佐々木友学（名古屋市出身）

小林白峰（福島県出身）

木村義賢（北海道出身）

身延山大学一年

石川義治（福井市出身）

近藤達也（山梨県出身）

身延山高校三年

三宅通昭（岡山県出身）

小田泰博（新潟県出身）

なお、このほか学生としては、

身延山大学三年

川島本良（神戸出身）

身延山高校三年

神藤文四（豊橋市出身）

身延山高校二年

武内源起（神戸出身）

以上三名が、この日の夕刻、宿泊する大  
阪市施市の、宝樹寺で合流することになつ  
ており、また八月一日二日の和歌山布教の  
際には、大学一年の中島康策（和歌山市出  
身）が参加することになっていた。

更に岩間布教部長は多忙の中、身延より  
西下して、七月二十八日の高岡布教と、翌

二十九日の大阪生野区の布教の指揮をとり

長谷川教務部長は二十九日の夕刻岩間部長  
と交代して以来、八月一日まで布教指揮を  
とることになっている。

間もなく急行「きたぐに号」がホームへ

入って来た。どの車輛も通路まで乗客が立  
っていた。真成寺の方々と別れを惜しみ、

やがて列車がスピードを増して来て、始め

て、  
△北陸布教は無事すんだのだ  
という安堵を覚えた。

満員列車の中、倒れ込むほど疲労し切つ  
ていたが、身延山の頭陀袋を胸にした修行  
姿である以上、坐り込むことも出来ず、通  
路に立ったまゝ車窓を眺めていたが、富山  
高岡・金沢・福井と列車がとまるたびごと  
に、

△こゝも布教したのだ

という懐しさが、こみあげて来ると共に  
△すいぶん飛び離れた遠隔布教をすること  
が出来たものだ

と、しみじみ思つたことだった。

（以下次号へつづく）

# ◇発行所の変更にともなつて◇

このたび、やむを得ない万般の事情によりまして、本誌の発行所を急遽、身延山久遠寺内より「甲府市朝日三丁目二番地妙本寺内」へ変更したことにつきまして、さっそく全国各地の読者より、各種の問い合わせがありました。先月号既報の通り鷲峰会自体にしましても、また本誌の主体性ならびに編集・発送・運営の方針にしましても、従来ど何ら變る所はありませんので、今まで通り御愛読され、より一層御支援下さいますようお願い申上ます。

但し発行所が甲府となりましたので必然的に本誌発送取扱いの郵便局は、從

よりまして、本誌の発行所を急拳、身延山久遠寺内より「甲府市朝日三丁目二番地妙本寺内」へ変更したことにつきまして、さっそく全国各地の読者より、各種の問い合わせがありました。先月号既報の通り鷲峰会自体にしましても、また本誌の主体性ならびに編集・発送・運営の方針にしましても、従来ど何ら變る所はありませんので、今まで通り御愛

読され、より一層御支援下さいます。 来の身延局から甲府局に變りました。そこで本誌発送部員は甲府局まで行つて発送手続きをいたします。

また読者におかれ振替口座を御使用される場合には「甲府」〇九三番、鷲峰会」と御記入下さいますよう、なお振替以外で鷲峰会ならびに本誌に関する通信は、その宛名の住所を「身延町波木井、醒悟園本妙庵内」と御書き下さいますようお願い申上ます。

編集後記

鷲峰

十月号

昭和三十九年九月二十日

第二卷 第十号  
通巻 第十六号

定期五十円

編集兼发行人 日高白象行

印刷所 甲府市中央二丁目五ノ二三  
天野勝写

発行所 甲府市朝日三丁目二番地

妙本寺内

鷲峰会

「本妙庵を天下の鬼道場にする」

とは日高上人の抱負でしたが、はて今度  
の此の修行は何時まで続くのでしょうか。

また次の冬休みには鷲峰会学生は、三泊  
四日の合宿で教学研修会を開く予定を立て  
ています。对外的布教と同時に、思想的自  
省内観も大切ですね。

誌料費

電話	(甲府) 二局五五八五番
振替	(甲府) 二〇九三番
半年分	三〇〇円(二共)
一年分	六〇〇円(一)

一年分 三〇〇〇円(分納可)